



おはなし職人

吉田 いくよ

赤い水玉模様のワンピース、黒い手袋と靴、レトロなおそろいの衣装でステージに立った十二名の女性たち。「真つ赤な太陽」を凝縮したわずか一分半の踊り。楽しかった！

一生懸命さと統一の美が良かったのだと思うが、「賞」を頂いた。そうそうできる経験ではないが、まだ体が利くので仲間に入った。周りを見回すと何と最年長。でも若手といっしょに踊ることが出来ることに喜びを感じました。

人間は、歌ったり踊ったり何かを表現したい、そういう気持ちを持っているものです。

ある娘さんが、生存率の低い悪性のガンになり、入院していた。七歳の時、激しい運動は禁止、体育の授業も見学と先生に言い渡されていました。しかし入院していても「よさこい」を踊りたい、踊りたい」と言っていたのです。高知の夏「よさこい祭り」は昭和二十九年からはじまった。県民はもろろ全国からも注目を集めている、楽しいお祭りです。その中でも何度も入賞経験があり、映画にも取り上げられた「ほにや」というチームで踊りたいと言う事。合格をもらって参加できることになったが、炎天下でかなり体力を消耗することになる。母親は「そんなことしたら、あんな死ぬかもしれない」思わず口をついて出た言葉。しかし娘さんは「死んでもかまん、踊りたい」七歳でありながら、その強い意志に驚いた母親。そうして七歳で迎えたよさこい祭り、「ほにや」の踊子百五十名の中に入って踊ることになったのです。

一番のメインストリートである追手筋に入ってきた彼女の姿を見たときは号泣したと母親。これまでいつも病気の事ばかりを考えてきた、それが大歓声の中で楽しそうに踊っている、命が精いつばいの輝きを放っていると母親には感じられたのでしよう。

一生懸命自分のやりたいことをやる。どんなことでも一生懸命行なう。真剣に向き合う。改めて気持ちを引き締めました。

幸いにしてやるべきことがあることに感謝しています。



今年の年間テーマは： 駆ける

馬編の漢字（駆・駒・駐・駿・驚・騷・馳・憑・駅・騎）をテーマにお届けします。

今月は【騷】

本田 恵津子

今、日本を騒がしている話題の一つがサッカーワールドカップ。サッカーよりはドジャースの大谷君を応援したいと思っている私ですが、オランダに追いつき、チュニジアに大勝利、決勝トーナメント進出を決めた日本代表の活躍に目が離せなくなっています。

「騷ぐ」の漢字の語源は、馬が蚤のように飛び跳ねるさまとの事。女が三人寄ると「姦しい」や五月のハエが「五月蠅い」と表現するなど、漢字は難しいけど面白いなと感じます。日本語の漢字は五万字以上もあるそうですが、常用漢字二千字程で日常生活の九十八%はカバーできるとか。常用漢字は小学校で一〇二六字、中学校で一〇一〇字学びます。世界の表音文字の数を比べると。英語は二十六字、日本語は四十六字で、カンボジアのクメール語が七十四字と一番多いのだそうです。ただ、日本語はひらがな、カタカナ、ローマ字、漢字と表記の種類が多いので、外国人がマスターするにはハードルの高い言語と言えます。

日本語ボランティアをしていると、読み書きに苦労する学習者が多い印象ですが、漢字が好きな人もいます。アルファベットが分かる人は、まずローマ字で日本語の発音、読み方を知り、自分の名前を書けるようにカタカナを習い、ひらがなを覚えてから漢字を学んでいきます。反対に、中国などの漢字圏の人達は、ひらがなだけの小学校一年生の教科書などは読み取るのが難しいそうで、漢字を書き加えて意味が分かるようにサポートします。確かにひらがなだけの絵本などは読みづらいことがありますが、よね。漢字のメリットは一目で意味を理解できる事。カレンダーの曜日や、道路標識など身近な漢字の意味を知ってもらったり、木、林、森のように組み合わせさせてサインのように覚えてもらったりと楽しく漢字を学習できるように工夫します。

物騒な事件も毎日のようにニュースになります。世界中の人達がスポーツを通して狂騒するワールドカップのような楽しい話題で、日本語教室の皆さんとも笑顔で交流を続けていきたいと願っています。



倉留 麻祐子

「騷」という字は、馬が体の蚤（のみ）に落ちて着きまを乱される様子から成り立った漢字だという。本来は、騒音や騒動など、静けさを失った状態を表す字だ。しかし我が家では、二人目の誕生とともに、その意味が少し変わった。

毎夜泣き声に起こされ、その声で長女も目を覚ましダブル合唱。おもちゃのオルゴールが流れ続け、ようやく日の出を迎える。朝になれば、炊飯器の音、洗濯機の音、夫が玄関を出ていき大泣きする娘の声、ミルクが欲しいと泣き喚く息子の声、保育園支度をしながら「早く歯磨きしてー！」「着替えてー！」と叫ぶ自分の声。確かに、全く落ち着かない。騒々しい日常だ。けれど先日、その娘と息子が発熱し、珍しくぐったりとしていた。体調こそ心配だけれども、それはそれは久々に静かな数日間、寝ている二人の横で読書でも楽しもうかと本を手にとった。いつも娘に隠しているお菓子と甘い飲み物をお供にして。なんて贅沢な時間：そう思ったのも束の間。おかしい：何かがおかしい。二三日経った頃から、なんだか心がザワザワし、あまりの静寂に心が落ちていきそうな感覚になった。近所に停まったトラックの音や、サラリーマンが歩きながら電話している声に、進み続けている世界から自分と子供たちだけ置いて行かれていくような気分になった。

喉から手が出るほど愛おしいと思っていた静かな時間。けれど静寂の贅沢さはそれ単体では発揮されず、騒々しい日常があるからこそ、その合間に訪れる静寂が際立ち、特別な輝きを放つのだと教えられた気がした。そう感じて以来、不思議なこと、私は以前ほど静けさに執着しなくなりました。朝から「静かに！」と叫ぶことも少なくなりました。

子供だけではない。家族、友人、職場……。誰かと共に生きる限り、今日も私たちの周りには、きつと騒がしく、そしてとても幸せだ。



宮本 美穂

「騷」という字には、どこか落ち着きのない、混乱した印象がつきまとう。しかし最近、その「騷」が人に与える力について考える機会があった。きっかけは、大好きな King Gnu のライブだ。オールスタンディングのフロアで、友人とともに声を上げ、手を振り、音楽に身を委ねて大騒ぎをした。周囲には見知らぬ人ばかりだったが、曲が始まれば関係ない。同じリズムに体を揺らし、同じ瞬間に歓声を上げる。その一体感は、日常では決して味わえないものだった。

不思議だったのは、あれほど動き続けたのに、まったく疲れを感じなかったことだ。むしろライブ後は心も体も軽く、活力に満ちていた。調べてみると、「ライブに行く」と寿命が延びる」という研究データがあるという。音楽体験による高揚感や、人とのつながりがストレスを軽減し、健康に良い影響を与えるらしい。

確かにあの空間には、年齢も職業も、住んでいる場所さえも異なる人たちが集まっていた。それでも音楽という共通言語を通して自然に心が通い合う。ほんの数時間の出来事なのに、まるで長く知っている仲間のような親近感が生まれるのだ。

日常生活では「静かに」「周囲に配慮して」と自分を抑える場面が多い。だが、ときには思い切り騒ぐことも必要なのではないか。声を出し、体を動かして、感情を解放することで、人は本来のエネルギーを取り戻すのかもしれない。

「騷」とは単なる混乱ではない。それは、生きていく実感と呼び起こす行為でもある。あのライブで感じた高揚と一体感を思い出すたびに、またあの場所に帰りたと思う。これからも、できるだけ多くのライブに足を運び、心が震える瞬間を積み重ねていきたい。それが、人生を少しだけ長く、そして豊かにしてくれる気がしているのだ。

次は大好きな「東京03」のライブで大笑いをしようと思う。

【編集後記】

七月を迎えました。まだ梅雨空の日も続いています。雨に映える草花に季節の移ろいを感じる頃となりました。蒸し暑さを感じる日が増えてきましたので、どうぞ体調に気をつけて、お過ごしください。